

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年2月25日現在

機関番号：33906

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20730458

研究課題名（和文） 90年代と2000年代の時代性が青年期心性に及ぼした影響に関する心理学的考察

研究課題名（英文） The influence of the 90s and 2000s on adolescence: A psychological study

研究代表者

安立 奈歩 (ADACHI NAHO)

椋山女学園大学人間関係学部・講師

研究者番号：70379519

研究成果の概要（和文）：質問紙調査より、90年代よりも2000年代の青年は、同一性拡散や対人関係・自尊心の苦しみが減ったことが示された。これを精神的に健康になったと見るか解離が進んだと見るかは議論の余地がある。また2000年代の青年は、空想や内省が苦手かつ解離傾向が高いほど、対人関係・自尊心の苦しみが高まることが示された。さらに質的調査より、2000年代の青年のうち内面と表現がうまくつながらない者は表現に儂さを抱える可能性が示された。適度に解離することと一貫した自分をもつことに関し、どのようなあり方を精神的に健康と見るかは継続的に考えたい。

研究成果の概要（英文）：A questionnaire survey showed that the score of “identity diffusion” and “difficulty of personal relations and self-esteem” on Adolescents in the 2000s (2000s Adolescents) is lower than those in the 1990s (90s Adolescents). It is open to argument whether this is because adolescents have become healthier mentally or whether it is due to an increasing tendency to be more dissociate. On 2000s Adolescents, it was found that the higher the score of “difficulty in fantasizing and reflecting” and “dissociation”, the higher the score of “difficulty of personal relations and self-esteem”. Qualitative research suggests the possibility that those 2000s adolescents who are unable to join their inner world and their expression have a fragility of expression. This study highlights the need for future research into being able to dissociate to an appropriate degree and maintaining a self that is consistent.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成20年度	育児休業等中断	育児休業等中断	育児休業等中断
平成21年度	600,000	180,000	780,000
平成22年度	700,000	210,000	910,000
平成23年度	100,000	30,000	130,000
年度			
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：

科研費の分科・細目：

キーワード：

1. 研究開始当初の背景
日本における青年期の心の問題は、戦後の

管理教育の激化などを背景に児童の問題として注目され、1970年代後半に思春期およ

び青年期の精神衛生へと急速に関心が広がった。青年期に関する心理臨床学的研究はここ 30 年足らずで発展したが、社会的変化も大きかったため経年変化が十分に採り上げられているとはいえない。また、心理臨床実践からの青年期研究は、事例研究か、治療者の印象論として語られるかに大別され、一般青年の理解と個別理解の観点とを有機的につなげた研究は少ない。

青年期は見捨てられる不安と呑み込まれる不安を同時に感じやすい時期であり、対人関係の病理を抱える境界性人格障害と類似する側面（これを境界例心性と名付けた）を持つという視点から、筆者は 1995 年に調査を実施し、1) 同一性拡散と強い対人葛藤を特徴とする青年は病理性が高く早期対応が望まれる、2) 関係に依存せず自律的であろうとする青年は病理性が低い比較的強い孤独感を抱えている、3) 境界例心性の低い青年は対人関係上のトラブルを抱えているものの病理性が低く自我強度を高めることで乗り越えられる、ということを明らかにした。

これに対し、近年、内省的で悩み深き青年が減少し、言葉にするのが苦手な身体化や行動化をしやすい青年が増加している傾向が年々際立ってきていることが、学生相談や精神科外来の実践報告として論じられている。青年は社会的変化に伴って、どのように変容しているのだろうか、あるいは変容していないのだろうか。

2. 研究の目的

本研究では、1990 年代と 2000 年代の時代性の影響を反映する青年期の心身の様相を心理臨床学的な観点から考察することを目的とし、1990 年代に青年であった者と 2000 年代に青年である者との比較検討をする。

3. 研究の方法

(1) 文献研究によって、青年期という概念および日本における 1990 年代と 2000 年代の青年について概観、比較をした。

(2) 安立 (1999) で調査対象としたのと同じの大学において、境界例心性質問紙 (安立, 1999) 他を実施した。調査の主旨を説明し了承を得た授業担当者に依頼し、集団法にて実施した。実施時期は 2011 年 6 月～11 月。

(3) 女子大生を対象に、①境界例心性質問紙 (安立, 1999)、②Galex (後藤・小玉・佐々木, 1999)、③日常的解離尺度 5 項目版 (柘田・中村, 2005) と日常的分割投影尺度短縮版 8 項目 (柘田・中村, 2005) を、筆者の担当する講義時間を利用して、集団法にて実施した。対象者は 79 名。実施時期は 2009 年

12 月。

(4) 女子大生を対象に、Galex (後藤・小玉・佐々木, 1999) を用いて質問紙調査を先で、フィンガーペインティングと切り絵を実施し、グループ活動の場で自分を表現してもらい、グループ活動や個人の特性から青年期の特徴を検討した。対象者は 29 名。実施期間は 2009 年 9 月～2010 年 1 月。

4. 研究成果

(1) 青年期 (adolescence) とは単に年齢期を言うのではなく、「工業化 (産業革命) を経た近代社会で誕生した社会歴史的な概念 (溝上, 2010)」であり、若者が労働から解放され、学校教育を通して大人になる発達の移行プロセスによって捉えられる (溝上, 2010)。日本では 1960 年代の高度成長期を機に、いわゆる青年期を謳歌する若者が増えた。インターネット・携帯電話の文化も普及していき、「オタク」研究の分野から東 (2001) は 1990 年代に質的な変容を見ている。1991 年のバブル経済崩壊とそれに伴う就職氷河期、さらに 2008 年のリーマンショックを契機とする就職超氷河期の到来で、産業構造の問題が青年期の過ごし方にも影響している。精神医学・学生相談の分野の報告および研究を概観すると、事象の捉え方に研究者の世代による温度差は見られるものの、青年が社会の変化に伴って変容しており、一般青年の持つ古典的な神経症的な不安は、特に 1990 年代以降にその病理性が重篤化し、2000 年以降に至っては、青年個人が葛藤や生成されるイメージを抱えるやり方が通用しない人格構造へと変容しているという見方がほぼ共有されていた。(論文①)

(2) 1995 年に実施された安立 (1999) の調査対象者は 174 名 (18–23 歳)、今回 2011 年の調査対象者は 135 名 (18–22 歳) であった。境界例心性質問紙の総合点および因子得点の平均について、1995 年データと 2011 年データ (男女込) を t 検定した結果、総合点および「感情易変性・衝動性」因子、「孤独感・見捨てられ不安」因子には差が見られなかったが、「同一性拡散」因子および「対人関係の不全感・低い自尊心」因子で、2011 年データの方が 1995 年データよりも有意に低いという結果となった。1990 年代の青年よりも 2000 年代の青年は、自分とは何かという悩みに苦闘することや、対人関係で苦しんだりすることが少ないことが分かり、これがメンタルヘルス上健康であるとするのか、解離が 1990 年代より高まったと考えるのかは課題であると考えられた。2011 年データについて因子分析したところ、因子構造にも 1995 年データと質的な違いがある可能性が

考えられた。男女差、因子構造の詳細な検討は今後の課題として残された。(未発表)

(3) 年代の比較ではなく 2009～2010 年実施のデータからの省察であるが、分析の結果、自分の感情への気づきや内面の言語化が難しい青年は境界例心性が高まることが示された。安立(1999, 学会発表①)も踏まえると、気づきや表現の質も含めて検討していく必要があると考えられた。内界に向き合おうとするがゆえに境界例心性の高まっている青年もいるため、表現の場を設ける学生支援の方向性が考えられた。また、空想や内省が苦手かつ顔の使い分けをする場合、自尊心の低下や孤独感の高まりが生じることが明らかになった。空想や内省は単独では内的安定に寄与するとはいえないため、本人の感情と現実世界を橋渡しする形で機能することが重要と考えられた。こうした青年理解を青年自身に伝えることで自覚を形成する学生支援の方向性が考えられた。“適度に解離すること”と“一貫した自分をもつこと”に関して、どのようなあり方を健康とするのかは継続的に考える必要がある。(論文②)

(4) Galex の 2 因子をもとに、“表現全般不得意群”(体感や感情の表現、空想や内省、ともに難しいと感じている群)、“イメージと表現の不連続群”(体感や感情の表現は難しくないにもかかわらず、空想や内省は難しいと感じていることから、イメージの世界で遊んだ上で表現がなされているかがはっきりしない群)、“イメージ表現探求群”(体感や感情の表現が難しく、空想や内省は難しくないと感じていることから、感じた違和感を見つめるためにイメージの世界に留まろうとしていると予想される群)、“表現全般得意群”(体感や感情の表現、空想や内省、ともに難しく感じていない群)と命名した。このモデルに従い、対象者の群間比較を通して、表現の生成過程を質的に検討した。モデル化した 4 つの群別に共通する特徴を抽出した結果、Table2 のような共通点が見出された。

Table.2 各群に共通して見られた表現の特徴

<p>【表現全般不得意群】 ①作品：他者の作品を取り込む傾向。具体物を作る傾向。人間感情が表現されにくい。②力動：場の影響を借りて自分を出す傾向。③語り：少ない。自分を出せるか否かが語りの中心。</p>
<p>【イメージ表現探求群】 ①作品：作品上にイメージを自覚的に表現。人間感情をどう表現するかのテーマに取り組む。②力動：制作に没頭する傾向。③語り：作品に込めた意味の語り中心。</p>
<p>【イメージと表現の不連続群】 ①作品：他者の作品を取り込む傾向。人間感情が表現されにくい。制作行動自体が表現。②力動：場依存的。同調と自分のベースのバランスをとる。③語り：関係性に関する語り中心。</p>
<p>【表現全般得意群】 ①作品：ストーリー性がある。作品上で対人交流する傾向。②力動：自分の感情と他者への配慮を調整する傾向。③語り：作品に語らせる傾向。ディスカッションのまとめ役のポジション。</p>

“イメージ表現探求群”は内面の表現を自覚的に試み、“表現全般得意群”もイメージを使って対人交流している点で、内面と表現のつながりが感じられた。いずれも質問紙上、空想と内省が得意な群で、イメージを用いて自身を物語ることのできる点で、古典的理論から解釈可能な青年たちであろうと考えられた。“表現全般不得意群”は表現以前のイメージ体験が不明瞭な場合、借り物のイメージで表現がなされる場合があった。“イメージと表現の不連続群”は、グループ内で孤立しない無難な表現、緊張した力動を緩和する意図の表現などが重視されていた。いずれも質問紙上、空想と内省が苦手な群で、表現しきれない等の言語化がなされた者は古典的理論から解釈可能であろうが、借り物で語れてしまっているかのような青年、場依存的で表現が二転三転する儚さを抱えた青年も混在している点で、この 2 群についてはさらなる検討を重ねていく必要があると考えられた。(学会発表①)

(5) まとめと今後の課題

先行研究の概観より、一般青年の持つ古典的な神経症的な不安は、特に 1990 年代以降にその病理性が重篤化し、2000 年以降に至っては、青年個人が葛藤や生成されるイメージを抱えるやり方が通用しない人格構造へと変容しているという見方がほぼ共有されていた。

質問紙調査より、1995 年と 2011 年を比較すると、2011 年の方が、自分とは何かという悩みに苦闘することや、対人関係で苦しんだりすることが少ないことが分かった。2009・2010 年に実施した質問紙から、空想や内省が苦手かつ顔の使い分けをする場合、自尊心の低下や孤独感の高まりが生じることが分かった。これらは、内省的で悩み深き青年が減少しているという報告や、友人関係がより表面化した付き合いへと変化しているという先行研究結果を裏づけていると言える。

2009 年に実施した質的調査より、上述のうち空想や内省の苦手な青年群の表現の特徴について、考察が行なわれた。

以上より、青年が 1990 年代から 2000 年代へと年を経るに伴って変容してきた可能性が窺われるが、短期間の調査であることや、サンプル数やサンプルの偏りの問題も顧慮すると、追試調査の積み上げが必要であろう。また、青年期心性の変容とはどのようなものなのか、あるいは変容しない部分は何なのかについても、更なる継続的な検討が必要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 安立奈歩、青年期心性に関する先行研究の概観—1990年代から2000年代を中心に—、椋山女学園大学研究論集人文科学篇、2012、43号、87-97
- ② 安立奈歩、青年期の境界例心性に関する再検討—解離の視点を導入して—、椋山女学園大学研究論集人文科学篇、2011、42号、95-105

〔学会発表〕(計1件)

- ① 安立奈歩、フィンガーペインティング・切り絵にみる現代青年の表現生成過程、日本箱庭療法学会、2010年10月10日、ノートルダム清心女子大学

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計◇件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安立 奈歩 (ADACHI NAHO)
椋山女学園大学人間関係学部・講師
研究者番号：70379519

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：